

ぶらりらいぶらりい

～図書室にはこんな本があります～

No. 57

★利用者からの質問をもとに昭和館図書室の資料を紹介します。

(書名の後の()の数字は請求記号です。)

問 従軍作家について知りたい。

答 「従軍作家」で検索してみます。

図書 → ことばから調べる → 従軍作家 (15件該当)

また、その他のキーワードでは、「ペン部隊」「兵隊作家」もあります。

図書 → ことばから調べる → ペン部隊 (93件該当)

* 但し、この場合「ペン部隊」は、類義語として「従軍記者」も一緒に検索しているため、多くの資料が出てきます。よって、目次等での確認が必要です。
(類義語で検索された場合、そのことばが赤字で表示されません。)

『「一億特攻」を煽った雑誌たち』(開架 051/Ta52)

『昭和 二万日の全記録 第5巻』(開架 210.7/Ko19/5)

『文化人たちの大東亜戦争』(210.75/Sa47)

『教科書に書かれなかった戦争 part14』(210.75/Ky4/14)

『日本の女たち 第3巻』(開架 367.2/N71/3)

* 当時の従軍作家による従軍記が掲載された雑誌等も見たい場合は、**全資料(総合検索)**で検索すると、上記の図書も含んだ一覧がでてきます。

図書室には、書棚に並んでいる図書以外にもたくさんあります。

検索端末を使って、読みたい本を探してみてください。

操作方法等がわからない場合は、カウンター職員までお気軽に…。

・・・もう一冊!!!・・・55

筆者は、図書館が嫌いなのです。毎日のように恩恵を受けているくせに、なんと言う罰当たりな事を・・・と思うかもしれませんが、図書館は、本好きにとって辛い空間なのです。

まず、図書館では本の箱を捨てます。最近カバーも付けたまま装備しますが、昔はカバーも捨てたものです。何故か？それは場所がもったいないからです。図書館の悩みは、保管場所の確保なのです。次に、シールを貼り、蔵書印を押します。蔵書印の中には、美術的に美しいものもたまにはありますが、99%、もう少し何とかならないのかなあ・・・と思うような判です。ああ、せっかくの本が台無しだ。と思うのは、筆者だけではないと思うのですが、シールは管理上で必要で、配架された本を探すときには、このシールが目標になるのですから、張らないわけには行かないのです。そして、その上に、痛んだときの修理が、これ以上ないくらい事務的な製本になるのです。それだけではありません。昭和館の利用者には少ないのですが、まず、図書館利用者の本の扱いは、良くありません。本の状態を考えずに、強く開いて、バラバラに壊してしまうことも多いのです。昭和館の本でも、ある戦時中のわら半紙の様な紙の、粗末な本が、バラバラになりかけているのですが、筆者が苦勞して収集したときにはピカピカだったのです。今同じ本を買おうと思えば、10万円出しても買えないのです。(最近の古書店の目録で見て、筆者自身が驚きました。さあ、どの本でしょう?)でも、利用してもらうことを目的にしているのですから、けちな事は言いません。整理され、装備されれば、どんな貴重な本でもどんどん利用してもらいたい気持ちはあるのです。でも、大切にしてほしいのです。ああ、貴重な本が壊れてゆく・・・という危機感は、図書館員全員の気持ちです。

話し変わって、最近、ボーッとしているときに、何となく「こんな図書館がほしいなあ」と夢想してみました。まず、集める本は、発売当初のまま、カバーも帯も、出来れば挟み込まれていた広告や、はがきまで揃った、完全なものに限ります。そして、1冊づつあつらえた透明なケースに入れて、ケースに番号とシールを張ります。そして、完全な収蔵庫で保管します。

では、どうやって読むのか？それは、収蔵図書は全てデジタルデータ化して、端末で読むのです。可能なら、全文を画像とテキストデータの2種類で持ち、元の姿で読みたい人は画像を、研究などで、内容の検索などをしたい人は、テキストデータを利用します。そうですね、そうならばもう図書館に来る必要は余りありません。インターネット上にデジタルライブラリーを開けばよいのです。(ま、著作権の問題はさておいて)そして、本の装丁や、用紙、印刷、素材など、データでは分からない分野の調査が必要などときには、現物がお出ましになるのです。今の図書館では、いったん修理製本された本は、発行されたときに、どんな姿だったのか、もう分かりません。本は内容だけでは本ではないのです。執筆者は内容を、編集者は、内容にフィットした紙や文字の組み方や、図版の入れ方を考えます。装丁家は、内容にふさわしい表紙のデザインや、製本方式を考えます。営業担当者は、帯にどんな言葉を入れたら、買いたくなるだろうかと、頭を悩ませるのです。これらが全部本の中身だとすれば、今の世の中の図書館の運営方式では、とても、本をチャンと後世代に残すことは出来ないことがわかります。

そこで、筆者は、また妄想にふけるのです。すばらしい保存状態の本に囲まれて、ご機嫌の自分の姿を。いつか、昭和館の別館として、そんな図書館が出来たら素晴らしいのですが。

(午睡)



—図書室から—

梅雨の季節になりました。お天気が続くと、もうそろそろお湿りが・・・と思い、雨ばかりだと青空を望み、なんだか気まぐれな限りです。梅雨明けまで、まだまだですが、元気に乗り切りましょう!

ぶらりらいぶらりい ～図書室にはこんな本があります～ No. 57

2004年6月22日 発行

編集・発行 昭和館 図書室

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1